



令和五年

大阪観世会定期能

第1回
6月10日(土)

第2回
12月9日(土)

実盛 観世 清和
二人静 大西 礼久
立出之一声 梅若 猶義

蝉丸 替之型 山本 章弘
阿漕 上野 朝義
大槻 文藏

開演 午後1時(両日とも)
於 大槻能楽堂

大阪府中央区上町A-7
TEL 06-6761-8055

一回券 一般 7,000円
学生 2,500円
一期券(二回券) 12,000円

大阪観世会

■演目のご案内

能《実盛》(さねもり)

篠原の里人が、説法中の時宗の遊行上人が独り言を呟くのを不思議に思っている(狂言口開ケ)。説法がはじまると老人が聴聞にやってくるが、その姿は上人にしか見えない。上人に素性を問われた老人は、ようやく自分は実盛だと明かして池のあたりに消える(中入)。里人が篠原における実盛の最期を語り(居語り)、上人が臨時の念仏をはじめると、錦の直垂を着た白髪の実盛の亡霊が現われ、ここで手塚太郎に討たれたこと、老武者と侮られまいと鬚髪を墨に染めていたため、すぐに素性が知られなかったこと、池水で首を洗われて実盛だと判明したこと、出陣にさいして平宗盛から大将が着る錦の直垂の着用を許されたことを語って(舞グセ)、あらためて上人に回向を乞うのだった。

能《二人静 立出之一声》(ふたりしずか たちいでの一せい)

吉野勝手明神の神職に、神前に供えるための菜を摘むように言われた女が菜摘川に行くと、里女が現われ、神職への言伝として、わが亡きあとを弔ってほしいと言って姿を消す(中入)。菜摘女が事のしだいを神職に伝えると、突如、最前の里女が菜摘女に取り憑く。神職が霊の素性を問うと、義経に仕えていた静の霊だと言う。静だと聞いた神職が舞を所望すると、里女はかつて静が神前に納めた装束を着し(物着)、舞いはじめる。すると静の霊が憑依した菜摘女と同じ姿で静の霊が現われ、菜摘女とともに、吉野での義経との逃避行と、頼朝の前で舞った白拍子を回想して舞い(舞グセ)〈序之舞〉、神職に回向を乞うのだった。

小書「立出之一声」では、静の霊は〈舞グセ〉〈序之舞〉のあいだは舞わずに橋掛りの葛桶に掛け、終曲部になってようやく二人の相舞になる。

能《蝉丸 替之型》(せみまる かえのかた)

第四皇子の蝉丸を捨て置けという延喜帝の宣旨を受けた臣下の清貫が、蝉丸を輿に乗せて逢坂山に向かう。盲目の蝉丸は逢坂山で剃髪し出家姿となり(物着)、蓑と笠と杖を渡され、ひとり山に残される。そこに都からやってきた博雅三位が蝉丸を藁屋にいざなうと(アシライアイ)、狂女となった蝉丸の姉、延喜帝の第三の皇女逆髪が、髪が逆立ったわが姿を「人間目前の境界」「順逆一如」と達観しつつやってくる(カケリ)。逆髪は、蝉丸が弾く琵琶の音色に導かれて、藁屋の蝉丸と手と手を取り交わして対面し、たがいにかつての境遇とは変わり果てた現在を嘆くが(居グセ)、やがて逆髪はまたどこかに向かうことになる。蝉丸は、何度も振り返りながら去ってゆく逆髪をいつまでも見送るのだった。

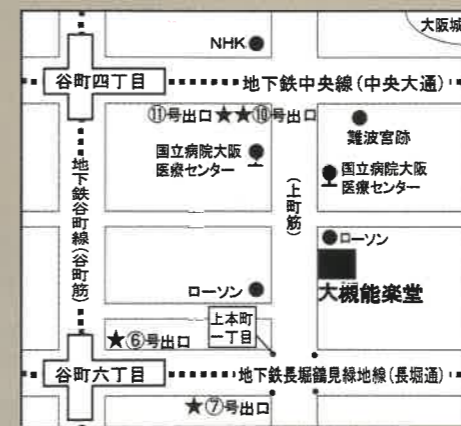
小書「替之型」では蝉丸もシテで両ジテとなる。

能《阿漕》(あこぎ)

日向の男が、海路、伊勢の阿漕が浦に着くと、漁にきた漁翁に出会う。ここは古歌に、「伊勢の海阿漕が浦に引く網もたび重なれば頭はれにけり」と詠まれた所で、漁翁は、昔、阿漕という漁師がこの浦で密漁して露頭し、縛られて沈められ、以後、浦の名も阿漕となったと語り(居グセ)、自分はその阿漕だと明かして弔いを乞う。やがて日も暮れ、漁翁は網を操るさまを見せ、叫び声を残して波間に消える(中入)。浦人が阿漕の密漁の顛末を語ると(居語り)、男の前に地獄に墮ちた阿漕の亡霊が現われ、漁をするさまを見せ(立廻り)、生前に捕えた魚に身を責められていると訴えて、波の底に消えるのだった。

(天野文雄『能楽手帖』角川ソフィア文庫による。)

●大槻能楽堂へのアクセス



会場アクセス

- 地下鉄谷町線・中央線「谷町四丁目」下車
⑩号出口を出て南へ約300m
(⑩号出口にエレベーター有り)又は
谷町線・長堀鶴見緑地線「谷町六丁目」下車
⑦号出口を出て北へ約350m
(⑦号出口にエレベーター有り)
- 市バス「国立病院大阪医療センター」下車
南へすぐ
※大阪駅から62号系統「住吉車庫前」行乗車
※「あべの橋」(天王寺)から62号系統
「大阪駅前」行乗車

大阪観世会では、新型コロナウイルス感染対策として下記事項を実施致しております。
御理解と御協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

- ・御来場の際はマスクの着用をお願い致します。
- ・会場受付にて検温、個人情報の提供をお願い致しております。
- ・体調不良または咳や発熱の症状があるお客様に対し、ご入場をお断りさせて頂く場合がございます。